様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０２９５０

研究課題名（和文）不注意ならびに多動性傾向の高さが学業成績や自尊感情に及ぼす影響に関する検討

研究課題名（英文）A study of the effect of inattention and hyperactivity on academic achievement and self-esteem

研究代表者
宮寺　千恵（MIYADERA, Chie）

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：９０４３６２６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、子供たちの不注意、多動性の傾向が高いことが自尊感情や学校生活での困難さとどのように関連するのかを検討した。対象は神経発達症の診断のある小学生から高校生（NDD群）、診断のない小学生（TD群）であった。子供には自尊感情や学校生活の困難さ、抑うつ症状、ソーシャルサポート知覚について、保護者には子供の不注意ならびに多動性の傾向、学業成績について尋ねた。その結果、学業成績は自尊感情に影響を及ぼすこと、NDD群はTD群に比べて自尊感情が低いこと、NDD群は両親からのソーシャルサポート知覚が高いことが示された。また、TD群では男児において不注意や多動性傾向が自尊感情の予測因子となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、子どもたちの不注意や多動性の傾向、学業成績が自尊感情にどのような影響を与えているのか、自尊感情がどのような要因によって予測され得るのかを検討することができた。神経発達症の子どもたちは自尊感情が低下することが知られているが、その自尊感情を学業成績やソーシャルサポート知覚との関連を示したことが学術的意義があると考えている。また、社会的意義としては、神経発達症の子どもたちがどのような側面で自尊感情が低下するのかを検討する土台作りに貢献できる知見になり得ることである。

研究成果の概要（英文）：This study examined how children's high tendency toward inattention and hyperactivity was related to their self-esteem and school experiences. The participants were elementary through high school students with a diagnosis of neurodevelopmental disabilities (NDD group) and elementary school students without a diagnosis (TD group). We asked children about their self-esteem, school experiences, depressive symptoms, and perceived social support. We also asked their guardians about their children's tendency toward inattention, hyperactivity, and academic performance. The results showed that academic achievement affects self-esteem, that the NDD group has lower self-esteem than the TD group, and that the NDD group has higher perceived social support from their parents than the TD group. In addition, inattention and hyperactivity tendencies were predictors of self-esteem in boys in the TD group.

研究分野：特別支援教育

キーワード：自尊感情　注意欠如・多動症（ADHD）　抑うつ症状　学校の経験　ソーシャルサポート知覚

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

注意欠如・多動症（以下、ADHD と表記する）は不注意、多動性、衝動性を核とする神経発達症である（APA, 2013）。ADHD 症状は就学前から認められることがあるが、症状の多くは小学生から中学生の学齢期に顕著に出現する。そのため、小学生以降に困難さが明らかになり、学校生活や家庭生活において困り感が増すことが多い。学齢期の ADHD の子どもたちは、学業成績がその子どもの学年や知的水準で期待されている水準に達していないことが多く、ADHD ではない子どもたちに比べて学業がうまくいっていないことが示されている（Loe & Feldman, 2007）。

ADHD のどの要素が将来の学業不振を予測するのだろうか。例えば、Rabiner and Coie (2000) は注意の問題に対する教師の評価が読みの成績を予測した。同様に、Massetti ら(2008) は、不注意優勢タイプの ADHD の子どもたちは、他のタイプの ADHD や定型発達の子どもたちに比べて読み、書き、算数の成績が低くなった。Rodriguez ら (2007) は、7～8 歳または 10～12 歳の時点で ADHD の子どもたちに調査を行った。この結果、彼らは ADHD 症状が読み、書き、算数における学業不振と密接に関連することを示し、特に不注意症状が学業成績の低下を 2～10 倍増加させていることを示した。これらの問題は中学生以降でも引き継がれ、中学生から青年期以降にかけて、学業不振はさらに深刻な状況に陥ることが多い。ここでは中学生以降の生徒を対象とした知見を整理すると、中学生以降では基本的な学業スキルの獲得の不十分さが長期的な学業不振に発展することが示された。

自尊感情とは、個人が自分自身を魅力的または有能であると考える度合いを反映する自己評価の一側面である。自尊感情は他者からの評価や課題遂行結果に伴って変動するものとして捉えることができ（阿部・今野, 2007）、特に思春期の心理的機能において重要な構成要素として広く認識されている（Orth & Robins, 2014）。ADHD の自尊感情については先行研究によって結果が一貫しないことが多いが、中学生以降では問題が深刻になることが多い。ADHD の生徒は学業成績の不振に陥ることで、意欲の低下や自己肯定感の低下を引き起こす。青年期において、ADHD 者のおよそ 34%が学校に行くことに大変大きなストレスを抱えており、友だちとのいざこざが頻繁したり、周囲の友達との違いを感じたりするために自己肯定感が低くなることが報告されている（Brook & Boaz, 2005）。また、ADHD だけではなく、抑うつや不安障害などの併存症状によって自尊感情の低下につながること（Treuting & Hinshaw, 2001）、内在化症状を併せ持つ ADHD 児は自己肯定感が低いこと（Bussing et al., 2000）が報告されている。このように、ADHD の子どもたちにとって学業成績の低下がもたらす影響は、学業面だけではなく、自己肯定感の低下など生活面全般の困難さにつながり得る。齊藤（2015）は、不注意や多動性・衝動性の傾向が強い生徒ほど学校生活での学業面と友人関係面でのネガティブな出来事を多く経験しており、この経験が子どもたちの自尊感情の低下、そして抑うつや不安といった内在化症状につながるというプロセスを明らかにしている。自尊感情には様々な要因が関連しているが、学齢期の子どもたちにとって学校生活での友人との円滑なやり取りや学業を含む学校生活全体の経験が大きく影響している。

子どものメンタルヘルスを維持する重要な要因としてソーシャルサポートがある（村上ら, 2016）が、ソーシャルサポートを受けている本人がどれほどそのサポートを知覚しているかをソーシャルサポート知覚という。ソーシャルサポート知覚が弱い子どもは、周囲からのサポートを受け取る感度が低く、ソーシャルサポート知覚が高いほど抑うつ症状が低い（村上ら, 2016）。ソーシャルサポート知覚は自尊感情との間に正の相関がある（Ikiz & Cakar, 2010; 細田・田嶌, 2009）。金井（2010）は、ASD 傾向の高い大学生は ASD 傾向の低い大学生に比べてソーシャルサポート知覚が低いことから、他者のサポート行動を適切に理解できない可能性があることを指摘している。また、ADHD の子どもたちは非 ADHD 児に比べてソーシャルサポート知覚が有意に低い（Emser & Christiansen, 2021）が、抑うつ症状との関連は認められなかった（Mastoras et al., 2018）。

２．研究の目的

上述のように先行研究では、子どもたちの ADHD 症状、抑うつ症状、自尊感情はそれぞれ関連が報告されており、加えて学校でのネガティブな経験やソーシャルサポート知覚との関連も報告されている。しかしながら、学校でのネガティブな経験とソーシャルサポート知覚との関係については明確に示されておらず、自尊感情を検討する上でソーシャルサポート知覚の要因の関与も考えられるため、子どもたちを取り巻く環境やそれに伴う経験を踏まえること、自尊感情の関連要因やその高低に関わる予測要因を検討することとした。

今回の一連の調査では、ASD や ADHD をはじめとする神経発達症の小学生から高校生、定型発達の小学生を対象として、自尊感情、学校でのネガティブな経験、ソーシャルサポート知覚との関連を検討することを目的とした。これらに加え、子どもの ADHD 症状、学業成績、抑うつ症状との関連も検討した。また、これらの変数が自尊感情の高低を予測する因子となり得るのかについても検討を行った。

３．研究の方法
１）調査対象者
神経発達症の診断のある小学生から高校生（NDD 群）、診断のない小学生（TD 群）であった。
２）調査内容
質問紙の内容は以下の通りであった。①～③は保護者、④～⑦は子ども自身に回答を求めた。
①子どもの基本属性：保護者に対して子どもの年齢、性別、学年について記載を求めた。さらに、NDD 群の保護者には子どもの学校種と所属している学級、知能指数（IQ）、診断名に関する情報を求めた。
②ADHD 症状の評価：不注意、多動性・衝動性の傾向を測定するために、ADHD 評価尺度（ADHD-RS；DuPaul et al., 1998；市川・田中, 2008）の保護者評価版を使用した。この尺度は、ADHD の主症状である不注意（９項目）と多動性・衝動性（９項目）の２つの下位尺度から構成された。各項目に対する保護者の回答は「全くない、またはほとんどない」（０点）から「とてもよくある」（３点）の４段階評価で行われた。それぞれの得点を合計し、合計得点が高いほど、不注意や多動性・衝動性が顕著であることを示している。
③学業成績：子どもの学業成績を、「とても苦手」（1 点）、「平均くらい」（3 点）、「とても良くできる」（5 点）の 5 段階で評定を得た。
④学校ライフイベント尺度：学校生活においてどのような出来事を経験したのかを評価するため、齋藤（2015）によって作成された尺度を用いた。これは、学業に関する４項目と友人関係に関する６項目の合計 10 項目で構成されており、項目に書かれた出来事の最近６ヵ月間での頻度について、子どもたち自身が回答した。回答は、「全然なかった」（０点）、「たまにあった」（１点）、「ときどきあった」（２点）、「よくあった」（３点）の４件法で尋ねた。学業および友人関係に関して、それぞれ得点が高いほどネガティブ経験の頻度が高く、ポジティブ経験の頻度が低いことを示した。以下、学業に関する得点は学業イベント、友人関係に関する得点は友人関係イベントと記す。
⑤自尊感情：子どもたちの自尊感情を測定するため、「自己知覚尺度日本語版（SPSC：眞榮城ら, 2007）」を用い、子どもたち自身に記入を求めた。これは Harter の自己知覚尺度改訂版であり、本研究ではこのうち学業能力評価、運動能力評価、全体的自己価値感の３つの尺度を使用した。各尺度は５項目からなり、SPSC でも最も高い因子負荷が示された項目を選んだ。学業能力評価と運動能力評価はそれぞれ学業面、運動面に関する自分の能力に関する評価であった。全体的自己価値感評価は、自分を全体として受け入れているかどうかに焦点が当てられている。子どもたちは、各項目が自分にどの程度あてはまるかを「あてはまる」（４点）から「あてはまらない」（１点）の４段階で記入した。中高生は、自己認識尺度青年期版（眞榮城ら、2007）を回答し、学業能力評価、運動能力評価、全体的自己価値感に関する計 15 項目を使用した。回答方法は児童期版と同じであった。得点はすべて合計し、得点が高いほど自尊感情が高いことを示した。
⑥抑うつ症状：子どもたちの抑うつ症状を測定するために、Birleson の児童用抑うつ性尺度（Depression Self-Rating Scale for Children：DSRS）日本語版（村田ら, 2011）を用いた。この尺度は小学生低学年から実施することができ、18 項目で構成される。１週間の気持ちについて、「いつもそうだ」（１点）から「そんなことはない」（３点）の３件法で尋ねた。逆転項目を変換した上で合計得点を算出した。合計得点が高いほど抑うつ症状が強いことを示した。
⑦ソーシャルサポート知覚：周囲からのソーシャルサポート知覚について検討するために、細田・田嶌（2009）が作成した質問項目のうち道具的サポートと情緒的サポートに関する 10 項目を使用した。各項目について、サポート源は父親、母親、学校の教師、友人とした。教示は、「以下に書かれている内容が、○○（サポート源）とあなたとの間で、普段どのくらいありますか」とし、「よくある」（４点）から「まったくない」（１点）の４件法で尋ねた。合計得点が高いほど、それぞれの人物からさサポートを多く受けていると知覚していることを示した。
３）倫理的配慮
質問紙はすべて匿名での記入ならびに返送を依頼した。調査の説明を行った上で、承諾を得られた学校や親の会を通じて質問紙を配布した。説明書を同封し、質問紙の返送をもって調査に同意したこととみなした。本研究に関しては、研究代表者の所属機関の生命倫理審査委員会の承認を得た。

４．研究成果
TD 群では、不注意症状や多動性／衝動性症状が強くみられるほど学校生活でのネガティブな経験が多いことが示された。不注意症状をはじめ ADHD 症状得点が高い子どもたちは注意集中が続かない、忘れ物が多いといった様相を呈しており、他の児童に比べて学校生活での困難さが強くなり、自尊感情の低下に結びつくことが示唆された。自尊感情は抑うつ症状との関連もあり、先行研究（Sowislo & Orth, 2013；齊藤, 2015）の知見と一致した。また、TD 群の自尊感情は母親からのソーシャルサポート知覚との間に相関を示した。TD 群の子どもたちは小学校高学年であるため、友人や教師に比べて家族からのソーシャルサポート知覚が高くなったこと、母親からのソーシャルサポート知覚のみが自尊感情との間に有意な相関を示していることが考えられた。TD 群について性差を検討した結果、多動性／衝動性症状、友人関係のネガティブ経験、教師や友人からのソーシャルサポート知覚において、男女間で有意差が示された。友人からのソーシャルサポート知覚は女子で強く、教師からのソーシャルサポート知覚は男子で高かった。また、

学業に関連する自尊感情は、男女ともに学業成績や学業関係のネガティブ経験と有意な相関を示した。学業成績は、学業に関する自尊感情の強い予測因子となった。また、男子では、不注意と多動性・衝動性症状は運動に関する自尊感情を強く予測した。学業成績が学業に関する自尊感情に本質的な役割を果たしていることが示された。

NDD 群は TD 群よりも不注意と多動・衝動性症状が強く、自尊感情が有意に低いことが示された。NDD 群の自尊感情が低い点については、Mazzone ら（2013）の先行研究と一致する結果となった。また、学校ライフイベントの結果から、NDD 群は TD 群に比べてネガティブイベントを多く経験していることが分かった。TD 群の結果からも、不注意症状が学業成績の低下や学校ライフイベントに関連していることが伺われ、NDD 群の子どもたちは学校生活全般において自尊感情を高める経験に乏しい様子が示唆された。ソーシャルサポート知覚については、群による特徴が顕著であり，両親からのソーシャルサポート知覚は NDD 群が高く、友人からのソーシャルサポート知覚は TD 群が高かった。金井（2010）や Emser & Christiansen（2021）の報告とは異なる結果になったが、本研究において NDD 群の対象者の年齢に幅があったことから、ソーシャルサポート知覚の発達にばらつきがあった可能性が考えられた。以上のように、NDD 群の子どもたちについて学校生活でのネガティブな経験が多いことは認められたものの、ソーシャルサポート知覚が TD 群に比べて低下することはなかった。

【引用文献（抜粋）】

細田絢・田嶌誠一（2009）中学生におけるソーシャルサポートと自他への肯定感に関する研究．教育心理学研究，57，309-323

Loe, I. M. & Feldman, H. M. (2007) Academic and educational outcomes of children with ADHD. Journal of Pediatric Psychology, 32, 643-654.

Massetti, G. M. et al. (2008) Academic achievement over 8 years among children who met modified criteria for attention-deficit/hyperactivity disorder at 4-6 years of age. Journal of Abnormal Child Psychology, 36, 399-410.

村上恭朗・他（2016）小中学生におけるメンタルヘルスに対するソーシャルサポートの横断的効果．発達心理学研究，27，４，395-407.

Rabiner, D. & Coie, J. D. (2000) Early attention problems and children's reading achievement: A longitudinal investigation. Journal of the American Academy of Children & Adolescent Psychiatry, 39, 859-867.

齊藤彩（2015）中学生の不注意および多動性・衝動性と内在化問題との関連―学校ライフイベントと自尊感情を媒介として―．教育心理学研究，63，217-227.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Miyadera Chie	４．巻 10
２．論文標題 Teachers’ Beliefs About Literacy Teaching in Japanese Elementary Schools from the Perspective of Special Needs Education	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Journal of Special Education Research	６．最初と最後の頁 1～10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.6033/specialeducation.10.1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 宮寺 千恵	４．巻 72
２．論文標題 子どもの自尊感情，学校でのネガティブ経験，ソーシャルサポート知覚との関連について ： 神経発達症児と定型発達児を対象とした検討	５．発行年 2024年
３．雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要 = Bulletin of the Faculty of Education, Chiba University	６．最初と最後の頁 163～169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S13482084-72-P163	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Miyadera Chie	４．巻 11
２．論文標題 The impact of inattention, hyperactivity/impulsivity symptoms,academic achievement, and gender on the self-esteem: a study of children in Japanese elementary schools	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Cogent Psychology	６．最初と最後の頁 2354961
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/23311908.2024.2354961	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関